

『わしといたずらキルディーン』

66年ぶりの新訳で再刊

毎日新聞

2008. 8. 25

皇室医務主管の熱意が実る

1942年に翻訳・出版された童話『わし姫物語』（マリ女王著、大槻憲二訳）が、新訳『わしといたずらキルディーン』（春風社刊）として、66年ぶりによみがえった。写真。新しい訳者は、旧訳者、大槻憲二の孫、長井那智子さん。背景には、宮内庁皇室医務主管で日本学術会議会長、金澤一郎さんの熱意があった。

作者のマリー女王は、19世紀末にイギリスからルーマニア王室に嫁いだ人物。物語は、おてんばなキルディーン姫が、高い塔に閉じ込められ、ワシの群れにしつづけるというもの。原著と同じ挿絵が美しく、大人も楽しめる。

金澤さんは数年前から、文部科学省や日本学術会議などで子供の心の発達について議論してきた。その過程で、自らが幼いころ、母親が読み聞かせてくれたこの童話の影響に気付いた。旧訳者の大槻は、日本にプロイトを紹介した最初期の精神分析学者で、学問的興味からこの童話を訳したという。

金澤さんは、図書館で往年の『わし姫物語』を見つけ、ぜひ今の子供にも読ませたいと、再刊を考えた。金澤さんは皇后陛下にもこの童話を勧め、皇后陛下は「よいご本を読ませていただきまして」と話されたという。そうこうするうちに、偶然、旧訳者の孫の長井さんがエッセイストとして活躍しているのと知り、新訳を頼んだ。

新訳には鷺田清一・大阪大学長らが推薦文を書いている。鷺田学長は「教育やまちづくりに取り組みひとにはぜひ読んでほしい」としている。

【鈴木英生】

